

## 日向神話教材化への基礎調査 —小学校第2学年「伝統的な言語文化」の指導イメージから—

永吉 寛行<sup>1)</sup>

### 要旨

平成29年に小学校学習指導要領が改訂されたが、国語科における「神話」に関する指導事項に変更はなかったが、「伝統的な言語文化」が「我が国の言語文化」という「内容のまとめり」の名称になったため、古典学習の範疇には収まりきらず、現代にまで続く言語文化の一表象として扱われると理解される。また、その教材化については、易しく書き換えたものが相応しいとされているが、この場合に言い伝えや昔話等の「独特の語り口調や言い回し」を取り入れたり、地域の言い伝え等を意識させたりと、いっそう言語文化を子どもたちに意識させることが留意されなければならない。しかし、令和2年発行の小学校国語科教科書を分析すると、旧態依然あるいは後退している状況である。そこで、宮崎県の小学校で使用する教材として相応しい神話を、各種条件を整理、考慮しながら選定を行った。

### 1. 問題の所在

平成29年告示の小学校学習指導要領・国語（以下、「新・指導要領」）〔第1学年及び第2学年〕2内容〔知識及び技能〕における(3)我が国の言語文化に関する事項において、「ア 昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞くなどして、我が国の伝統的な言語文化に親しむこと。」が指導事項として設定されている。この指導事項は、前回（平成20年告示）の改訂において、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の中で「(ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。」として、初めて昔話や神話・伝承の読み聞かせが指導事項として設定されたことを踏襲している内容であり、特に目新しいことではない。ただ、前回は「思考力・判断力・表現力」の指導の範疇であったのに対して、新・指導要領では「知識及び技能」の中で伝統的な言語文化に親しむ方策として位置付けられているという違いがある。本稿では、その相違から派生する諸問題については言及せず<sup>1)</sup>、新・指導要領に基づいた各社教科書掲載教材の検討から浮かび上がってきた諸問題を検討するとともに、どのような教材を児童に用意することが相応しいか、授業の基本的デザインはどうあるべきか等についてそのアウトラインを明確化することを目的とする。

### 2. 「新・指導要領」解説のポイント

新・指導要領解説の文言も基本的には前回のものを踏襲している。全文を引用することは紙幅の関係で省略するので、ここではそのポイントのみを示す。

- ・ 神話等は、児童が伝統的な言語文化としての古典に出会い、親しんでいく始まりである。
- ・ 古代からの人々のものの見方や考え方が、口承や書物の形で現在に引き継がれてきた。
- ・ 昔話は、空想的な物語であり、神話・伝承は伝説的に語られている物語である。
- ・ 教材は、古事記、日本書紀、風土記、地域に伝わる伝説などが考えられる。
- ・ 易しく書き換えたものを取り上げて、「読み聞かせ」を行うとよい。

<sup>1)</sup> 宮崎大学大学院教育学研究科

- ・親しみを感じるポイントは「話の面白さ」「独特の語り口調や言い回し」である。
- ・言語活動としては、地域の人々による民話の語りを聞いたり劇を行ったりすることなど。

以上、解説の本文を箇条書きにしたものだが、何点か重要な指摘、提言がある。

まず、神話等の性格について、それは空想や伝説的に語られてきたものであると明言している点である。つまり、事実かどうかはこの際指導上の問題ではないということである。古代の人々のものの見方や考え方を言葉の伝承という形で受容し、そこに言語文化を感じる事が重視されるのである。浅田孝紀(2021)は『伝統的な言語文化』=『古典』になっている感が否めない。これを『古典』の中に矮小化してしまってはならず、むしろ全ての言語文化に伝統性がある」と述べているが<sup>2)</sup>、神話等が伝承してきた言語文化は確かに古典の範疇では収まりきらず、現代にまで受け継がれてきた精神性全体をも包括すると言ってよいだろう。

次に教材化に際しては、易しく書き換えたものが相応しいとする。小学校1、2年生にとって「易しい」の条件は何であろうか。適当な分量、言語の獲得状況に適合した言葉遣いや用字、話の分かりやすさ(起承転結等の構成)や話の面白さ(動きやスピード、教訓性等)がなるべくストレートに伝わること等であると考えられる。そうなると、ある程度の「ストーリー性」も必要となり、また、人権に配慮した表現や性的表現の排除等もこの「易しい」の条件に入る。

さらに「独特の語り口調や言い回し」についても実は配慮が必要な項目である。つまり「易しく書き換えた」文章にも「独特の語り口調や言い回し」を入れなければならない。となると、具体的な「独特の語り口調や言い回し」について、ある程度確定されることが必要である。「むかし、むかしあるところに」は昔話を語る時の定番口調であるが、例えば神話における「独特の語り口調や言い回し」とは何であるか、その検討が必要であろう。

言語活動についても言及しておく。「地域の人々による民話の語りを聞いたり劇を行ったり」が例示されているが、地域によっては「地域の人々による語りを聞く」ことが困難である。あくまでも例示ではあるが、「劇を行」うという例示は興味深い。昔話や神話・伝承を劇化することによって親しませたり、あるいは思考力、判断力、表現力等を伸ばすことにつながる授業実践は想像しやすい。しかし、この指導事項が「我が国の伝統的な言語文化」の指導事項であることにまで思いを致すとき、教材を劇化するという学習活動ではなく、すでに劇化されたものを活用、あるいは鑑賞することも、テキストのみの言語文化理解にとどまらない理解、そして親しみにつなげていくことが可能はずである。「伝統的な言語文化」から「伝統文化」の理解という範疇に広がっていくからである。例えば神話であれば神楽の有効活用が期待されてよい。

以上のように、新・指導要領では、教室における学習イメージをより示唆するものに進化していると同時に、具体性となるとクリアしなければならない要素を多分に持っているといえる。

### 3. 検定済教科書教材の検討

令和2年度から新・指導要領への切り替えを期して、各社が教科書も改訂し、4社(G社、K社、M社、T社とする)が小学校国語を発行した。各社の神話教材掲載の特徴をまとめる。

**(1) G社** 2年(上)に単元名「むかしのものがたりをたのしもう」として掲載された教材は「ヤマタノオロチ」である。全8ページで挿絵は4枚。大蛇や竜が出てくる他の話を読み、類似点を話し合わせる。また、「因幡の白兔」「海幸山幸」も読んでみるように促している。

**(2) K社** 2年(上)に単元名「文化」として設けた本編には、教師による「いなばのしろうさぎ」の読み聞かせのみを提示し、比較的大きな挿絵で雰囲気作りをしている。神話本文は巻末

付録として掲載し、本文は2段組で4ページ。(正確には3ページと8行。)挿絵はなし。福永武彦による文である。「付録」の性格上、学習課題等は記されていない。

**(3)M社** 2年(上)に単元名「聞いてたのしもう」としているが、本編には教師による読み聞かせの提示、登場人物や出来事など、物語の内容を確認するポイントのみが記されている。神話本文はK社と同じく巻末付録に「いなばの白うさぎ」が2段組4ページで掲載されている。挿絵はない。このM社の特徴は、付録という位置付けながら、読み聞かせの他に読み手の変更・自らの読書・他者への内容伝達など「読み聞かせ以外の楽しみ方」が例示されている点である。

**(4)T社** 2年(上)に単元「言いつたえられているお話を知ろう」があるが、2ページにわたって掲載されているのは茨城県水戸市に伝わる昔話である。3ページ目に神話の存在が述べられているが、具体的な神話は「やまたのおろち」「いなばの白うさぎ」が各55字前後で簡単に紹介されているのみである。小さな挿絵が各1枚。4ページ目に地域の言い伝えや神話の読書、興味を持った箇所を選択、児童同士の読み聞かせなどの学習活動が提示されている。

以上4社の神話教材掲載状況を概観したが、共通するのは「読み聞かせ」授業の提示は当然のこととして、K社を除いては他作品との読み比べや感想の伝え合い等、指導事項本文の「読み聞かせを聞くなどして」の「など」の例示を拡大し、児童の「我が国への伝統的な言語文化」への親しみを、より効果的な授業工夫によって深めさせて欲しいという要望の表れであろう。

#### 4. 宮崎県独自の神話教材開発

以上に鑑みて、宮崎県内小学校(特に第2学年)で使用する神話教材について考察する。

まず、宮崎県は日向神話の発祥地であり、神話教材がそのまま「地域に根ざした教材」として扱えるという大きな利点がある。日向神話の舞台となった地も、「イザナキ、イザナミの国生み神話」「アマテラスとスサノオ」「海幸山幸」等、県全域に縁の地があり、親しみの度合いも他県に抜きん出て深められる可能性を持つ。

そこで、具体的な教材化の視点を考えてみたい。上記各社の教材を見ると、1段組8ページまたは2段組4ページという分量となっている。字数にして約1,500字程度である。さらに表記については、学年別配当漢字に配慮することは言うまでもないが、神の名前にも配慮したい。例えばアマテラスオオミカミ、コノハナサクヤヒメ、ウガヤフキヤアエズノミコトなど小学2年の児童が認識し記憶するには、どう考えても長すぎる。「アマテラス」「コノハナヒメ」「フキヤアエズ」「山幸」等、省略や言い換えの名で統一するような配慮が必要であろう。

また、教材として「完結性」「道徳性」にも注意したい。約1,500字というある意味限られた分量の中で、物語としての起承転結があり、登場人物の心情の変化(ほとんどの場合は「成長」)がそこに見えてくる話であることが望ましいと言える。また道徳性にも注意したい。もちろん国語科には国語科の目標があり、道徳科には道徳科の目標がある。つまりそこには児童生徒に身に付けさせたい資質・能力には明確な線引きがある。しかしながら、新・指導要領の第4章「指導計画の作成と内容の取扱い」には、「(10) 第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、道徳科などとの関連を考慮しながら、第3章特別の教科道徳の第2に示す内容について、国語科の特質に応じて適切な指導をすること。」と示されており、その解説にも「教材選定の観点として、第3の3(2)に、道徳性の育成に資する項目を国語科の特質に応じて示している。」と記される<sup>3)</sup>。また、石原千秋(2005)においても、「戦後の学校教育は子供の人格形成を使命の一つとしてきた。そして、いわゆる主要教科の中でその役割を中心的に担ってきたの

が国語である。」「戦後の国語教育では道德教育に主眼が置かれてきたのである。」と述べられ<sup>4)</sup>、具体的な教科書教材分析を通してそのことを論証している。つまり、神話教材においてもその道德性を包含することが実際に教室で扱う教材としては相応しいということになる<sup>5)</sup>。

さらに「人口への膾炙」の度合いなどを宮崎県による広報物<sup>6)</sup>、あるいは幼児期向け絵本への収載状況<sup>7)</sup>など、そして、前述したように「易しさ」の観点から考えると、伝統的な言語文化に親しむ第一歩という位置付けに相応しい神話は「海幸山幸」であると考えられる。兄弟同士心のやり取り（交流がすれ違いだった点も含めて）、「謝る」ということ、誠意を起因とする救済への展開、約束遵守の重要性などが描かれている。このような多種の要素があり、言語による情景描から心情や場面の理解の種類も多様化し、読み聞かせを含む言語活動によって日本神話を通して我が国の言語文化への親しみを深めさせるに相応しい。

海幸（ホデリノミコト）が最終的には弟の山幸（ホオリノミコト）に屈服させられ、その後子孫の代まで守護の任に就くことになったという古事記の記述内容には若干の配慮が必要かもしれない。宮崎県教育委員会の教材提供サイトにおいても、山幸が海幸に釣り針を返すところまでを述べた後、「この後どうなったのか、続きは自分で調べてみましょう。」としてあり<sup>8)</sup>、テキストとして明確に示すことを避けている。ただし、海幸が山幸に屈服させられたその時の心情を不承不承ではなく、前非を悔い、最大限の謝罪の心情表現であったと捉えることも可能で、そのような「豊かな読み」を導き出せるのであれば、教材として不相当とはいえない。

海幸山幸だけでなく山幸の子・ウガヤフキアエズまで含めれば高原町にまでに広がるなど宮崎県広域にわたる海幸山幸伝説（神話）は、宮崎県の小学生（低学年）の伝統的な言語文化教材として様々な教育的効果をもたらすと言えるだろう。

## 注・引用・参考文献

- 1) 平成 20 年告示の指導要領「解説」にも、「児童が伝統的な言語文化としての古典に出会い、親しんでいく始まりとして、昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞いたり、それらを発表し合ったりすることを示している。」等、「親しみ」にポイントが置かれていた。
- 2) 浅田孝紀(2021)『「伝統的な言語文化」の探求・探究を促進する国語教室の構築—小学一年生から高校三年生までを通して—』『月刊国語教育研究』585号(2021年1月 日本国語教育学会)
- 3) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』東洋館出版社、平成30年、p161
- 4) 石原千秋(2005)『国語教科書の思想』筑摩書房、2005年、p74
- 5) 日本神話を読むこと自体で、「我が国や郷土の文化と生活に親しみ、愛着をもつこと。」(新・指導要領「特別の教科 道徳」2内容の第1学年及び第2学年)に繋がるという考え方もあろうが、本稿ではその物語の内容に道德性が包含されるかどうかを問題としたい。
- 6) 宮崎県観光推進課記紀編さん記念事業推進室『ひむか神話 50の物語集』等を参考にした。
- 7) 例えば、あかね書房「日本の神話」シリーズ(赤羽末吉・絵/舟崎克彦・文)では、「くにはじまり」「あまのいわと」「やまたのおろち」「いなばのしろさぎ」「すさのおとおおくにぬし」「うみさちやまさち」の計6話が収められている。
- 8) みやざきひむか学ネット「海幸彦と山幸彦神話と祭りや風習」  
[http://www.miyazaki-c.ed.jp/himukagaku/unit/yume\\_09/page3.html](http://www.miyazaki-c.ed.jp/himukagaku/unit/yume_09/page3.html)(2021年3月10日取得)